社団法人
日本書芸院
「伝統と創意」
広報紙
書くよろこび
第3号

〒540－6591
大阪市中央区大手前1丁目7番31号
OMMビル7階
TEL 06-6945-4501　FAX 06-6945-4505
Eメール info@nihonshogeiin.or.jp
ホームページアドレス
http://www.nihonshogeiin.or.jp/

平成20年（2008年）4月発行
編集・発行人　栗原 蘆水

豊かな心は手書き文字から

私たちは児童生徒一般すべての人々の書写の環境を整え、豊かな心を取りもどすため総力をあげて「手書き文字の振興」に取り組んでいます。

日本の伝統文化芸術を守り育もう
すばらしい日本語の心を伝えよう
心を映す文字をより大切にしよう
書く楽しさ喜びを通して健やかな心を養おう
美しい文字で潤いのある豊かな人生を送ろう

寄稿

文部科学省
初等中等教育局長　**金森 越哉** 氏

気持ちが直に伝わってくる

情報化が進展する今日、文字は印字されることが多くなりましたが、筆順にしたがって一点一画を丁寧に手で書くことは、文字感覚が養われ、集中力や思考力を高めることにもつながっていきます。この手で文字を書くことが芸術へ昇華したものが書道であり、漢字の書や仮名の書、漢字仮名交じりの書など、多彩で深遠な世界を展開しています。そして、今も我が国を代表する芸術として多くの人々に愛好されています。

このような我が国の伝統文化でもある書道を含めた文字・活字文化を振興するため、平成17年に「文字・活字文化振興法」が制定されました。文部科学省においては、この法律に基づき、図書館の充実や学校教育での言語力の向上などの施策を総合的に進めています。また、教育基本法に新たに伝統や文化の尊重が規定された趣旨等を踏まえ、小・中学校における書写の改善や高等学校における書道の充実、思考力・判断力・表現力等をはぐくむため、各教科等における言語活動の充実等を改善の重要な視点として、学習指導要領を改訂してまいります。

このような状況の中で、社団法人日本書芸院が行う文字に親しむイベント「手書き文字ばんざい！」や書道展の開催、広報紙の発行等の取組は大変意義深いものであり、我が国のよき伝統と文化を継承し発展させる上で、大きな役割を果たすものであります。

時折届く手書きの手紙には、書いた人の気持ちが直に伝わってくるようで温かさが感じられます。昔から「書は人なり」と言われてきましたが、手書きの文字を見ると、その書きぶりから書いた人の人となりが伝わってきます。「手書き文字にこそ魂が宿る」という信念を基に、社団法人日本書芸院が、今後とも、書の楽しさ、すばらしさを発信し、より多くの人々が書道に親しみ、「書くよろこび」を次の世代に引き継がれることを大いに期待しております。

文字・活字文化振興法の骨子

【目的】
文字・活字文化の振興策を推進し、知的で心豊かな国民生活および活力ある社会の実現に寄与する。

【基本理念】
国民が等しく豊かな文字・活字文化の恵沢を受ける環境を整備する。国語が日本文化の基盤であることに配慮する。学校では「言語力」をはぐくむ。

【責務】
国や地方公共団体は文字・活字文化の振興策を策定し、実施する責務がある。

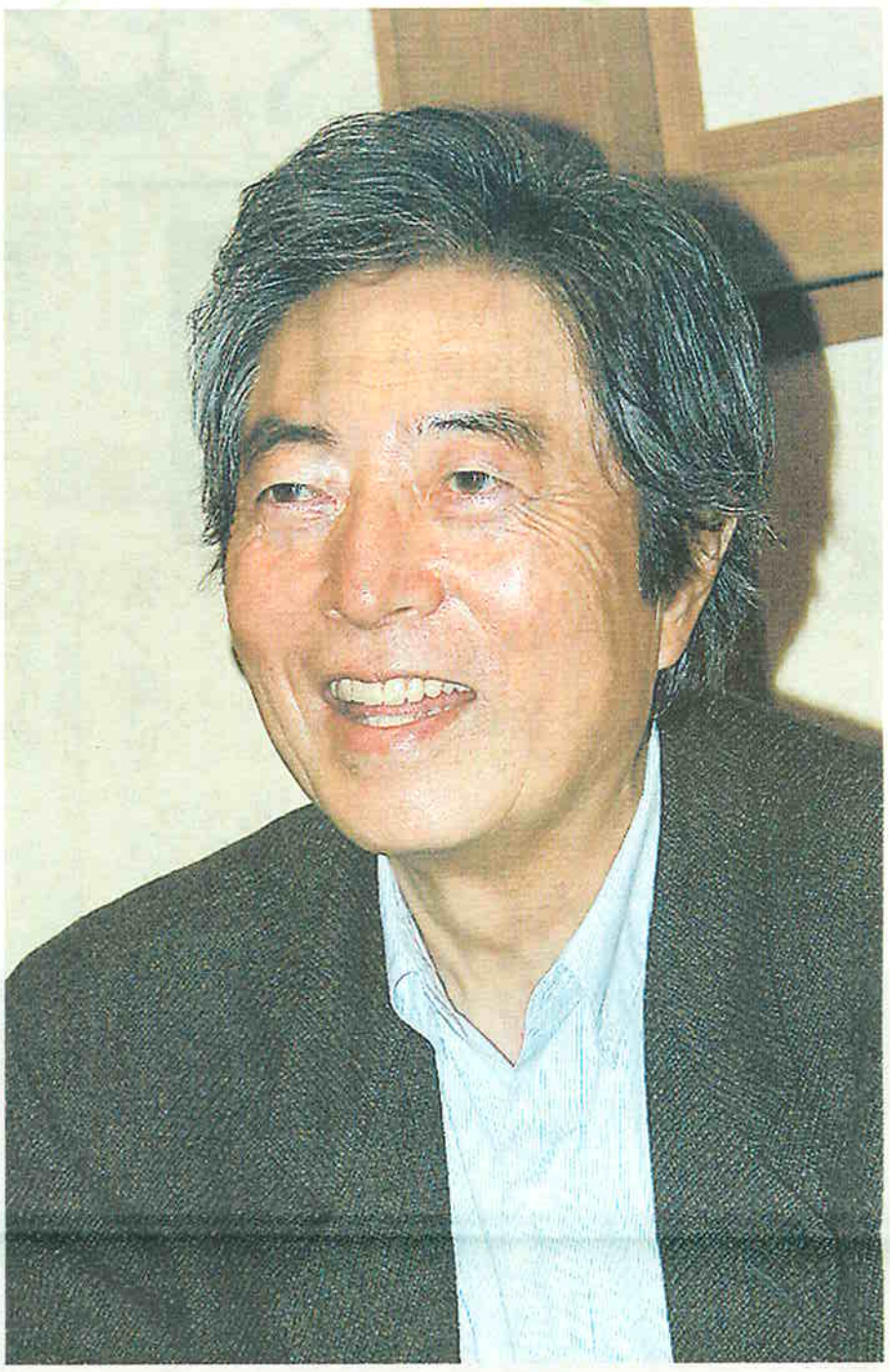
【地域での振興】
市町村は公立図書館を設置する。国や地方公共団体は司書の充実など人的体制を整備し、資料の充実を図る。学校図書館を開放する。

【国際交流】
文字・活字文化の海外への発信を促進。翻訳の支援をする。

【文字・活字文化の日】
国民の関心と理解を深めるため、十月二十七日を文字・活字文化の日とする。

細川 護熙・元首相

書をかくよろこびを語る



初冬の昼下がり、湯河原にお住まいの元首相細川護熙氏をおたずねし、書をかくよろこびをいろいろとお話しいただいた。政界を引退した氏は、ここ湯河原で、陶芸三昧と筆をとる日々に明け暮れている。その成果を問う＜細川護熙数奇の世界＞展は、平成十九年春から東京、新潟、金沢、熊本、大阪で開かれ、大きな反響を呼んだ。作品集＜晴耕雨読＞も出版されている（新潮社、平成十九年刊）。

西嶋慎一・日本書芸院特別顧問

平成19年11月19日
湯河原・細川護熙氏邸で

同席者　本文中の「○」は同席者の発言

日本書芸院特別顧問　**西嶋 慎一**
日本書芸院常務理事　**真神 巍堂**
日本書芸院常務理事　**横山 煌平**

床の間の軸

○　清厳宗渭をお好きなのですか。

細川　書かれている字句が面白いと思いましてね。「狂人走不狂人走」。狂人走れば不狂人走る。日常性の脱却ですかな。

○　清厳さんの書でも、こんな狂草風な手は珍しいですね。

細川　何かいかにもこの言葉に合っているような字ですね。とても面白いと思って。あの三字目の「走」の雰囲気がユニークですね。

○　読みにくいですね。ちょっと「欲」みたいに見えますね。

細川　永青文庫にも、たしか二点あったかな。しかし、この激しい手ではない。

○　書道お好きなんですね。この軸も随分細かく見ておられる。

細川　いいえ、そんなに専門にやっているわけではありません。

○　大雅堂をお好きでは。ご著書の「晴耕雨読」の「一成一切成」は大雅の風ですが。

細川　大雅と玉蘭さんが合作した作など欲しいのですが、なかなかないですね。アメリカのフィラデルフィア美術館での大雅と玉蘭展に合作が出ていました。

○　見に行かれましたか。

細川　いいえ、図録で見ただけです。

湯河原の家

細川　ここは、昭和の初めに母方の祖母が建てた家なんです。伊東とか箱根とか熱海とか、あちこち温泉の質を専門家に聞いて一番良いというので、ここにしたらしいのです。

○　ここにお湯がでるのですか。

細川　源泉です。床暖房も温泉で。

○　よろしいな。そしたらやっぱり地熱で暖かいですね。

細川　このすぐ上辺りから奥湯河原になるんですけれども、奥湯河原の辺りは時々、雪が降りますが、この辺りはまず降らないですね。

○　お庭の左手が、有名な枝垂れ桜ですか。

箸でなぞり素読

手習い

細川　そうです。奥に大きな山桜が一つ、三本にこう分かれておりますね。右手のほうにも山桜があります。けっこう、桜の時季にはきれいなんです。

○　紅葉もきれいでしょうな。こういう好環境で字を書くのはよろしいな。この部屋で書かれますか。

細川　工房でね。この奥に陶芸のかまを三つすえた作業場があるんですが、そこの机で。

○　立ってですか。

細川　そうです。立ち机で書いております。書き疲れると、頭を上げれば茶室の一夜亭が目に入って来て、ホッとするのです。

○　秀吉の清洲、一夜城に因んだあれですな。藤森照信さんの設計で、手作りだそうですね。

細川　工房もそうです。銅板で外壁を貼ってありますが、その継ぎの鋲打ちもみなでわいわいやりながら仕上げました。書は一人でやらにゃいかん孤独な作業ですが、先生方よくおやりになられる（笑）。

○　熊本県知事時代に、公共施設の額などをかなりたくさん書かれたようですね。

細川　私は新聞記者をしておりましたので、もう悪筆でね。「おまえの字は読めん」と社内で言われておりました。知事になってから、あっちこっちの、小学校とか公民館とか書かねばならない。それで、金曜日なんかに夕刻二時間くらいとりまして、知事公舎の広間で、秘書さんに大きな墨すり器で墨をすってもらって、新聞紙をそこらじゅうに広げて、そこへ書いたものを広げていました。

○　そうすると、今、熊本にたくさん残っているわけですね。一遍行って見てこないかん（笑）。好きじゃなきゃできないわ。

細川　ええ、あちこち橋やなんかに残っているわけですね、恥ずかしい字が。つまんないものも書かせるわけです。小学校や公民館ならまだいいのですが、何々トンネルとか、土地改良基盤整備事業の何とかとか。あまり書きたくないものが多いんですね。それでもう半分嫌気がさしながら書いていました。

○　片仮名が入るとかなわんな。

細川　片仮名はちょっと気が進みませんですね。

○　やはり、それまでにどこかで筆に親しまれる機会があったのですね。

細川　いや、それまではなかったですね。

○　じゃ、天性、手筋がよろしいんですわ（笑）。昭和十三年のお生まれですと、昭和二十年に国民学校に入られたわけですか。

細川　そうです。

○　そうしますと、すぐに終戦で、お習字は占領軍に禁止されますから、小学校で筆に親しまれる機会はなかったわけですね。

細川　なかったですね、はい。

○　中学校では、どうでございましたか。

細川　中学は私立の栄光学園で、カトリックの学校ですから、日本的なこういうものはあまりやらなかったですね。

○　お家でも筆をお持ちにならなかったのでしょうか。

細川　はい、家でも全くやりませんでした（笑）。

○　随分お父上から「論語」とか「万葉」とか「古今」とか、じきじきに厳しい薫陶を受けたと聞きますが。

細川　はじめは「古文孝経」で、これは宇野精一先生に教わった。宇野先生は熊本の出身でしてね。父からは厳しくしつけられました。割り箸を持って一字一字なぞりながら素読をする。まちがえると、父が割り箸で手の甲をたたくんですね。それは痛い思いをした（笑）。

○　お父上の護貞先生や、おじい様の護立先生は書をおやりになりましたでしょう。

細川　祖父はかなりやりましたね。毎晩、三、四十分は練習をしていました。食事の後たばこを一本だけ吸って、それから書をやるというのが日課でした。

○　その時、そばに控えて墨をすられたとか。

細川　あ、それは多少ありますね。私は高校、大学時代にかなり祖父と一緒に暮らしておりましたので。

祖父の面影を想う

白隠さんの書

○　その墨の香りが忘れられないとか（笑）。

細川　いや、そんなことないです。全然関心ありませんでした（笑）。父は自分では教えることはしませんでしたが、王羲之とか顔真卿とか、もちろんコピーですけれども、そういうものをいろいろ渡して「これで手習いしろ」というようなことはよく言っておりました。高校時代ですかね。そんなものをぱらぱら見たりはしておりました。その後空海さんとか、小野道風、橘逸勢とか、そういう人たちの手をぱらぱらと見る機会はありましたけれども。

○　鑑賞はなさったんですね。

細川　祖父は毎晩、食事が終わってから居間に白隠と仙厓を掛けるのが日課でした。そんなのは見ていますね。

○　護立先生はお好きでしたね、白隠が。白隠の作が世に出るきっかけを作られた。

細川　ええ、祖父は若いころ病気になって、白隠さんの「夜船閑話」を読んで病気を克服した。これは禅道修行者のための養生の本ですね。以来、白隠さんを崇拝するようになって、白隠さんが晩年住した静岡の松蔭寺の辺りを白隠さんの作品を求めて歩くわけですね。人力車で作品を集めて回ったらしい。だれも見向きもしない、本当にまくりのまま押し入れに放りこんであるのを求めて歩いたそうです。

○　護立先生がお好きなことはよく存じ上げておりましたが、そのような逸話ははじめて知りました。

細川　千点ぐらい集めたと言っておりましたね。その中で、つまらないものが恐らく随分あった。作にしみがあるとか焼けているとか、大分処分したんだと思います。それでも今、三百三、四十点ありますね。

○　なる程、それ等を見せられて、先生眼が肥えてるわけや。それが書の上達の秘訣ですな。

細川　いや、いや。

○　目習いをたんとしておられる。手習いに目習いは必須ですからね。生来の手筋に目習いが磨きをかけた（笑）。護立先生は洒脱な字を書いておられる。

細川　どういうふうに習ったのかちょっとわかりませんけど、いい字を書いておりましたね。ただ、ほとんど残っておりません。

○　クルト・ブラッシュさんが、こちらの白隠を中心に本をまとめておられます。

細川　私もまだ中学生か高校生だかのころ、ブラッシュさんに何回かお目にかかっています。在日のドイツ人で祖父の影響ですかね、白隠にほれこんで。あれからですかね、ヨーロッパなんかで人気が出て。

○　外国から展覧会の申し込みが多いのではございませんか。

細川　今、ベネチアの美術館から来ていますね。クレムリンの美術館からも来ています。

細川　白隠さんだけでなく、案外知られていないんですけど、仙厓さんもすごく多いんですね。百五十点ぐらいたしかあったと思いますね。墨蹟もかなりある。虚堂智愚さんとか。私も、これは意外に書の作品を見ているのかな（笑）。墨蹟の整理はほぼ終わっているのですが、そのほかのもの、特に典籍とかになると全く整理が終わっていませんですね。何しろ、十四万点なのか十五万点なのか、総数もわからず蔵の中に積んであるだけで。

永青文庫と墨と硯

○　永青文庫には墨も硯もいいものがございますね。あれを使われたことは。

細川　いや、ありません。永青文庫にもいい硯があるんやなと知ったのは本当に最近のことですね。「芸術新潮」で永青文庫の特集が出ました折、祖父が亡くなるまで親しくしていただいていた佐久間さんから話を伺ったのですが、佐久間さんは、すごく美術に詳しいお方なんですよ。もう八十ぐらいになられるのですが、「いい墨がたくさんあったはずやから、それをお探しなさい」と言われるんですよ。あちこち探すんだがないんですね。

○　硯もよいものがございますね。歙州（きょうしゅう）の青鼠色の青琅玕は日本一だと思いますが。

細川　佐久間さんがおっしゃるに、このくらいの端渓の硯で、すごくいい眼の入っているのがあって、祖父が数ある硯の中でも一番それを得意になって見せていたと。それと墨を早く探しなさいと言われているんですけどね。なかなか両方とも出てこない。

○　書の作品を書くのに忙しくて、探すひまがない（笑）。

細川　永青文庫の整理がまだできていなくてね。何というか、やっぱりもともとが美術館ではなく、祖父のプライベートなお客様にお見せするだけの私的な施設だものですから、美術館としての体裁が整っていないんですね。

○　いまやっておられる、細川護立の目というような展示が一番ふさわしい感じがいたしますが。

細川　そうですね。あれごらんいただけましたか。国宝・重文も結構出ている。あれだけのスペースであれだけいいものが出ている展覧会も少ないと思いますね。

○　墨蹟もあるでしょう。

手習いの師匠

○　対馬に行かれた際、陶芸の小林東五さんに書も篆刻もお教えいただいたとか。

細川　いや、教えていただいたことはないんです。書では、熊本県知事時代に、田内研水さんに教えを請いました。

○　漢字の先生ですか。仮名の先生ですか。

細川　仮名の先生です。盛んに題字を書かされるのに、まあ素養がないわけですね。それでどなたか身近にいい先生はいないかと、県庁の秘書課の人なんかにいろいろ聞いてもらったら、田内先生が県庁のOBで、今は引っ込んで書道教室か何かしておられるから、お願いされるのがいいんじゃないですかということになった。中村龍石先生のお弟子さんです。

○　熊本の。

細川　はい、いまは中村先生の奥様がおやりになっている。だから私は田内先生の弟子なんですよ。今、お幾つなのかな、七十五ぐらいになられたんじゃないかと思いますね。

○　先生につかれるのは、書がお好きなんですね。

細川　いやいや、そもそも動機はそうじゃないんですから（笑）。

○　田内先生から、特に書の古典、王羲之などを習われましたか。

細川　そういうことは全くしませんでした。好きな言葉だけお手本をいただいたり、添削をしていただいているだけです。

○　じゃ、今でも常々。

細川　ええ、時々。でも、やっぱり仮名はまだよくわからないですね。全くわからないと言ってもいいのかもしれません。特によく言われるのは墨継ぎですね。それで、チェックをお願いする。

○　お使いになっている印は、どなたか特定の篆刻家の作でしょうか。

細川　いえ、そんなものじゃございません。存じ上げている方が「作ってあげましょう」というので、いただいたりしたものです。

○　「花守人」といったしゃれた関防印をお使いですが、ご自分でもやられますか。

細川　いや、自分では全くやりません。

○　じゃあ、専ら筆でお書きになるのが楽しいという、好きなお言葉を（笑）。

細川　言葉が先にあるものですからね。言葉があって、好きな言葉があって、それを何かに書いてみようかなと思うだけです。空海さんでしたか「また古意に擬するを以て善しとなし、古迹に似るを以て巧みとせず」の心持ちでやっておるだけです。

細川護熙・元首相 書をかくよろこびを語る

詩人ゆかりの地へ

好きな言葉

○　お好きな言葉というと「残生百冊」のタイトルで、無人島にながされたらば、持っていって読みたい百冊をあげておられますが、その中からが多いですか。

細川　そうですね、「又得たり浮生半日の閑」とか、「一山行き尽くせば一山青し」など好きですね。いまの生活からは、「山中に暦日無し」、「汝自ら当に知るべし」の心境です。

○　千宗旦の二度目の隠居「又隱（ゆういん）」を意識されておられるようですが。

細川　西行さんの詠う「山里は人来させじと思はねど、訪はるることぞ疎くなりゆく」の心境が魅力です。「かたみとて何のこすらむ、春は花、夏ほととぎす、秋はもみじ葉」の良寛さんの歌も好んで書きます。

○　余り杜甫をお読みにならないようですが。

細川　いや、そんなことはありませんよ、読みますとも。杜甫の詩でも好きなものはいろいろありますけど、まあわりにつらい話が多いですからね。どっちかというと李白のほうが、まだいいという感じでしょうかね。漱石の「人よりも空、語よりも黙」などは、私の心境に近いな。

○　「笑って答えず、心自ら閑かなり」ですか（笑）。

漢詩の旅

○　月一回として四十八回ですね。

細川　そう、チベットとかも結構、もちろんシルクロードもそうですが陶淵明、李白、白楽天など、好きな詩人ゆかりの地に一遍行ってみたいと思っていたところに行けるものですから、引き受けました。まず、江南へ二週間行きました。柴桑栗里といえば陶淵明隠棲の地ですから、私としてはぜひ見ておかなくてはと思って。

○　私も昭和五十八年に行ったことがあります。

細川　柴桑栗里の面影が残っていたでしょうね、そのころは。いまは、何かすっかり変わっちゃっている。

○　小川に小さな石板の橋がかかっていて、農家が何軒か、住んでいる人は皆陶姓といった。

細川　ああ、そういう面影があちこち残っているといいなと思うんですが。カメラマンがロケハンに行ったら、建っていたりして写真にならないと。ビルが（笑）。

○　ああ、それはいかんですね。

細川　黄鶴楼を楽しみにしているのですが、よほどいい角度で撮らないとビルが写っちゃうという。

○　三月というと、まだ少し寒いですね。

細川　そうですね。春・秋、春・秋と年に二回ずつ二週間ずつ出かける予定です。

○　揚子江から南を集中的にお回りになると。

細川　そうですね、黄山などにも行きたいですね。私は書くだけだからかまわないのですが、カメラマンのほうは冷や冷やしていましたね（笑）。NHKの特集とか漢詩紀行のビデオを見て、「ああ、いいとこある」と思うんですけど、この間行ったカメラマンは、「いや、もうちっともそんな景色はなかったです」と言われました。

○　上海美術館に寄られましたか。

細川　はい、最後の一日美術館に行きました。上海から南昌へ行き、青雲譜にも行ってきました。

○　八大山人が住んだ青雲譜ですか。

細川　そうです。八大山人の画は住友さんの図録で見ましてね。彼の画は彼の境遇を思うとそのよさがわかりますね。

○　何か書に関したことは書くご予定でしょうか。

細川　南昌といいますと黄庭堅に縁がありますね。書の話もどこかで書きたいんですね。硯の話になるかもしれません。書でも硯でも焼き物でも漢詩に限らず、ぜひそういうものもどこかで入れていきたいと思います。

細川　私の好きなのはやっぱり陶淵明はじめ、いわゆる王孟韋柳（王維、孟浩然、韋応物、柳宗元）という人たちのものが好きなんですね。陶淵明の柴桑栗里へも行ってきました。

○　最近ですか。

細川　「週刊文春」に月一回見開きで書いているんです。「ことばを旅する」という題ですけど、一休さんとか道元さんとか、良寛さんとか書きました。言葉の旅ですから、ゆかりの場所に行って書いています。それが四十八回で丁度一冊になる。

それが終わって「ああ、これでやれやれ」と思っていたら、好評なので続けてくれということになった。日本はもう勘弁と申しましたら、では中国の漢詩でも老子さんでもいい。諸葛孔明でもいいし、西遊記でも紅楼夢でもいい、それを四年間やってくれというのです。

陶芸

○　焼き物はかなり専門的に。

細川　いや専門的かどうかわかりませんが。

○　その陶芸に疲れた時に、ふと書を書きたくなるとか、お気持ちの切りかえみたいなものは。

細川　特にそんなことはありません。ただ祖父がさっきお話ししたように、一日三十分ぐらいは手習いをしておりましたから、やっぱり昼間はろくろ――まあ毎日ろくろをまわしているわけじゃありませんけど、一週間に二回ぐらいでしょうかね。二、三時間するのかな。あとは何だかんだと、いろいろな雑用があるものですから、夜ここで落ち着いているときには、できるだけ祖父のまねをして、三十分でもいいから少し何か好きな言葉でも書こうと思っています。

○　どんどん先生やってください。

○　今年やられた〈数寄の世界〉展は、どこも大入満員のようですね。

細川　陶芸は書よりもちょっぴり専門的に習いましたかね。奈良の辻村史朗さんの工房で一年半ろくろのひき方を習いました。

○　この間、楽茶碗の小川長楽さんの息子さんが家におけいこに来ましてて、本を見せたんです。そしたら、この志野焼がすごいと言うて。

細川　ああそうですか。へえ。

○　志野の釉薬のかけ方に随分苦労なすったようですが。

細川　志野はね、まだなかなかうまくいかないんです。たまに、ああいうものが出るんです。まあ、でも一かまやって一個出るかどうか、本当に少ないですね。

○　どの手が難しいですか。志野、楽、高麗、唐津、信楽、伊賀といろいろおやりですが。

細川　やはり志野ですね。いや、一遍わかってしまえば、どれもみんな同じだと思うんですけど、志野の場合、美濃のほうの土を使っていますから土は間違いないと思うんですけど、その土と釉薬がマッチしているのかどうかですね。釉薬も長石の割合がどうだとかいろいろあるもんですから、それがその土にうまく合っているか、温度がそれでいいのか。それからその冷まし方が難しい。だんだん徐々に冷やしていかなくちゃいけないんですね。

○　難しいですね。

細川　鈴木蔵先生のとこなんかでも、厚い壁のかまで、徐冷しておられます。普通の薄いかまだとすぐ冷めてしまうものですから、その辺のところの加減がいまひとつつかみ切れない。

○　いや研究熱心でおられますね、専門家や。

独創を追い求め

細川　陶芸でも筆を使うことは多いですよ。志野でも絵唐津でも、何かちょっと書かなくちゃいけませんのでね。

○　筆の世界ですか。

細川　刷毛目の茶碗を作る際、何の筆でかくかすごく気になるのです。いろいろな筆を試しましたが、結局一番いいのは、今のところすすきの穂ですね。すすきの穂を、束ねてかくのが一番どうも今のところ刷毛目がよく出るんですね。筆でかくと、べったりいってしまってだめですね。わらなんかを束ねると、ちょっと硬過ぎちゃう。刷毛目の筆は重要ですよ。初めのころ無邪気にやっていたころのほうがうまくいっていましたね。茶碗なんかも最初に作った井戸茶碗が一番面白い。

○　我々が作品書くのと同じですね。一枚目はうまくいくけど、それからどんどん、どんどん深みにはまってうまくいかなくなる。

用紙

○　紙にも随分景色をお求めのようですね。

細川　いや、何かちょっと、こう自分なりに独創しなくちゃいかんと思いましてね。光悦さんなんかは宗達下絵の紙を使われた。光悦の字はもちろんいいんですけども、より一層宗達さんの紙で引き立っているわけでしょうから、私も、自分なりの料紙を使ってみようと思って。普通の白い紙に書く場合も、少し古色をつけるために柿渋を打ったり、温泉にちょっと紙を入れてみたりですね。

○　景色を求める以上やね（笑）。

細川　それから、コーヒー、紅茶、あらゆるものをやりましたよ。コーヒーは香りがしすぎてだめですね。あまり人工的にそんなことをするのはよくはないかもしれませんが、でも柿渋で少しぐらいやるのならいいんじゃないかと思いましてね。最近は、書く言葉に合わせて少し青墨を流してみたり、あるいは植物染料で少し景色をつけてみたりもしています。

○　何か焼き物の肌と似たようなもの、景色をお求めになるのかなと思うんですが。

細川　いやいや、必ずしもそんなことではないんです。

○　中国の紙はかなりお使いになりますか。北京の琉璃廠によくおいでになるようですが。

細川　初めのうちは琉璃廠の紙なんかはいいんじゃないかと思っていたんですけど、最近わりにいい紙が永青文庫の蔵の中から出てきたりしたものですから、もう琉璃廠は全然ご用じゃなくなったですね。

○　それは護立先生あたりが使い残したものが。

細川　ええ、多分そうなんだと思いますけどね。父も結構いいのを持ってましてね。それで、そういうものが蔵の中の隅っこに結構入っていたんです。前は、あちこちお寺さんにうかがったりしたときに「こちらには屋根裏か何かに古い紙がありませんか」って伺っていた（笑）。そしたら「いや古くてもう色が変色して虫が食うてますけど、それでよかったら」と言われたことがあるんです。それでいただいた紙なんか、もう本当にありがたい。

筆

○　筆はいつも決まったものをお使いになっている。

細川　筆がまたたくさんあるんですよ。父が使っていたものが、そうですね、そこの壁の中いっぱいぐらい、本当に大小さまざま、大きさもいろいろ、それもちょっと使ってみたいと思いながら、まだ選別するところまでなかなかいかない、そのぐらいありますね。

○　そうしますと、何かお気に入りのものが出ますか。

細川　田内先生からご紹介いただいた熊本の小さな文具屋さんの筆が、まだ少しあるものですから、それで書いていまして、父の筆にいいのがたくさんあると思うんですけど、なかなかそこまでたどり着けないんですね。

○　わりに硬めですか、お使いなるのは。

細川　硬めなのか、柔らかめなのか、よくわからないですね。

○　羊毛はあまり使われない。

細川　ではないと思いますけどね。でも筆のことはやはり気になるものですから京都なんかで彩雲堂さんとか、たまに参りますよ。

○　このごろ一連の個展では、茶碗よりも書の数がどんどん年々増えているような感じがするんですけどね。

細川　そうですね。焼き物の数が減って、その分、書で場所をうめていかないと。

○　大分、書道の先生のほうを侵食されて（笑）。

細川　いやいや。

○　我々はそのほうがうれしいかもわからん（笑）。

装幀

○　軸の装幀もユニークですね。全部ご自分でお決めになっていらっしゃいますか。

細川　まあ、アイデアをですね、「この紙でお願いします」とか「こういう中まわしで」とか「この風袋で」とか。

○　彩りが見事でございますね。

細川　表具師さんがびっくりされて「こんな組み合わせは見たことがない」とか、いろいろ言われますけど、やってみたら案外面白かったと。

○　ルオーの絵を茶室にかけられるのも、その方向で。

細川　いや、ルオーはすぐやめましたが、お茶席はまあなんでもありが面白いですよ。これ何だかおわかりになりますか。

○　竹のはしごだ。

細川　はしごなんですね、インドネシア辺りの。たまたま大徳寺の立花大亀さんがお亡くなりになられる前に、何か托鉢のときのずた袋とか、何かもろもろ入っていましたのに、一式こう入ったものをいただいたんです。そこにこれが入っていました。

○　ふんどしではないかな。

細川　そう、ふんどしを送ってこられた。

○　やっぱり（笑）。

細川　それに「力」と書いてあるんです。それでおもしろいから、いつかお客様のときに、これを床に掛けたんですよ（笑）。どなたも、さすがにおわかりにならなかった。

○　色も二色だったんですか。

細川　ええ、そのまま、もとのままです。

○　狂人走やな（笑）。書は書き始めるとぶっ続けで。

細川　いや、そんなことはありません。夜、本当に食事が終わってから、私は割合早く休むものですから、まあせいぜい十時かそのくらいまでです。

○　じい様が書いておったな、なんてことが思い出される。

細川　それは時々思い出して、そのくらいやらなきゃいかんなと思って。

○　そういえば、これはじい様が使ってた紙だなあ、とか（笑）。結構、大作をこのごろ書いてはりますね。六曲とかね。あれもやっぱり机の上ですか、お書きになるのは。

細川　屏風は下で書きます。本当は屏風なんかもう少し書きたいんです。

○　屏風はまだ紙を染めていませんね。

細川　ええ、本当は金箔、銀箔に書きたいんです。墨がのりにくいそうですね。

○　中性洗剤を墨の中へ少し入れると、墨のつやは消えますが、墨がのって、見事に散りませんね。

細川　昔はミョウバンとか何か使っている。それと、「捨てニカワ」というそうですが、ニカワとミョウバンを混ぜた薄め液を使ったと聞きましたが、中性洗剤なら手軽だなぁ（笑）。

○　直接書かれるんですか、屏風は。良寛さんみたいに。

細川　やっぱり失敗したらたいへんだと思いますのでね。まあ下書きしてからですね。金屏風になると、それは高いですからね。最初に書くときはやっぱり手が震えるでしょう（笑）。

○　いや大丈夫ですよ。その、ふんどし精神でぜひ（笑）。

日本人の感性を

細川護熙・元首相 書をかくよろこびを語る

習字と教育

○　信長をお好きですね。狂人走の代表ですか。

細川　細川家の御祠堂がありまして、先祖代々を祭っていて、そこは開けちゃいかんと、代々そういわれて来た。ところが、あるとき台風で雨漏りがし始めましてね。これは開けねばいかんだろうと開けた。幽斎公なんかのご像がかかっているのならわかるんですけど、いきなり正面に信長の肖像が飾られていて驚きました。

○　劇的ですね。

細川　信長さんに代々非常に世話になった。それで本能寺のときにすぐその恩返しをして遺徳に報いるということで、霊を弔い画像を飾ったのでしょう。

○　信長の愛唱した謡曲「敦盛」をお好きなようですが。

細川　「人間五十年」ですね。信長のえらさは、中世的な枠組みを破壊し近世への道程を切り拓いていった、見通しの鋭さにありますね。「狂人走不狂人走」精神を実証した人でしょう。

○　「不東庵随筆」の残生百冊を拝見しますと、読書の範囲が広いというか近ごろはあまり読まれていないものを多く取り上げておられますね。「十八史略」とか「名臣言行録」とか。

細川　まあ、あんな本は一般的にはあまり読まんのじゃないでしょうか（笑）。私は小学校に入る前から、そのような本で鍛えられましたからね。

○　手の甲を割り箸でたたかれるのやね（笑）。

細川　終戦間近の頃は鎌倉に疎開しておりましたけど、そのときもずっと防空壕の中でろうそくをともして毎晩続いておりましたからね。三つ子の魂百まで忘れずで、わりと覚えている。

○　お手習いは入らなかったのですか。

細川　ないんですね。時がそういう生臭い時代でなければ恐らくやらされてましたでしょう。武道も熊本の師範の方に指南していただきましたしお能もやらされました。そう言われてみますと、書だけ抜けている（笑）。

○　一番先にやらないかんことを。

細川　そうですね。

○　いま教育の現場で、いわば一番無視されてしまっておる、忘れているところを小さいころからおやりになった。

細川　そうですね、素読なんかね。

○　そこらをどうお考えになりますか。いまはもう徹底的に実学教育になりまして、教養というか、人間の根幹になる部分がすこっと抜けてしまっておりますけど。小さいうちに筆を持ち墨に親しむなどが。

細川　字も覚えますしね。やっぱり日本人の感性を養う上で非常に大事なことだと思いますね。私なんかも、小さいときから習字をやっていたら本当によかったなと思います。

○　先生、もっとそうだとどんどん言うてください（笑）。

細川　中国なんか、筆の上の方をこう持って今でも子供たちに練習させるそうですね。この間NHKのビデオを見ていましたら、小学生の子供たちが、これは王安石の詩ですとかって、みなわかるんですね。私が見たビデオは、陶淵明や白楽天が活躍した場所だから、それでそれ等の詩を覚えさせるのかもしらんが「いや、それは違います。それは孟浩然です」とか何とかやっている。感動的でしたね。文革で途切れたんでしょうが、また最近やり始めているんだと思って感心しましたね。

○　「私も早いうちにやっておいて身についたんだ」と書かねばいかんね（笑）。

細川　そうですね、本当にね。何も漢詩だけでなく、島崎藤村でも北原白秋でも何でもいいんですけど。そういうものをどんどん暗唱させればいい。私は、小学校は、読み・書き・そろばんで十分だと言っているんです。あまりに学校でつまらんことを教えるものだから、私も学校時代によく反発したものです。

中学校で因数分解とか二次方程式とか、そういうくだらないことを教えるものですから、それに反発して、本当に好きなこと以外何もしなかった。厳しい学校だったものですから、とうとう落とされて、一学年下の弟と同じになってしまった。高校へ行くときは素行も悪かったものですから「あなたは出ていってくれ」という（笑）。

○　いや、それは、また申すようだが、ふんどしの話でよくわかりますね（笑）。

細川　余計なものを教え過ぎですね。やっぱり感性が大事なんだと思います。それは政治にしたって文化の中の一つなんだし、やっぱり感性が必要なんだと思うんですけれども、そのためにはあまり余計なつまらんことを教えないで少し自然の中で子供たちを遊ばせて必要なことだけをしっかり教えるようにしたらいい。

○　今のお立場やったらそういうことがわりに言いやすいのでしょうか。政界におられたら言えませんね。

細川　いやいや、言えないこともなかったんですけど、そんな余裕もなくてですね。ともかくカブトムシ見たら、すぐ五百円だとか何とかってそういう話はとても味気なくてやっておられませんですね（笑）。

吉田松陰の松下村塾でも、広瀬淡窓の咸宜園でも、塾といわれるところは、熊本の時習館もそうですが、藩校でも教える課目は少ないですね。その精神をもう一度復活させるのが本当は一番いいんでしょう。いまの時代は、それに多少語学が入るかもしれませんけど。

○　咸宜園からは、本当に錚々たる人材が次から次へと出ておりますね。

細川　私なんかでも、本当をいえば塾を一番やりたいですね。別に立派な建物など要らない。そこらの公民館を借りてもいいし、ここでやったっていいのですけど、とりあえずお掃除ぐらいから徹底してやってもらう。そして北原白秋でも李白でも、そういう私自身も好きなものを、十五～十八歳ぐらいまでの人に限定して、そういうものをきちんとやることができたらおもしろいと思うんですけど。

○　手習いは必須でございますね。

細川　もちろん必須ですね、それは（笑）。絶対に必須ですよ。私はいつも思うんですけど、松下村塾でも咸宜園でも、その生徒の数は少ないんですね。イエス・キリストでもお釈迦様でもマホメットでもみんな十二～十三人ぐらいの弟子しかいなかったわけですから。ひざ詰めでないとなかなか伝えたいものも伝わらない。

○　先生、ぜひ私塾をお開きください。微分積分は要りませんが、手習いは入れてください。教室の正面に、この清厳宗渭の「狂人走不狂人走」をかけられたらいかがでしょう（笑）。

いろいろと有益なお話をありがとうございました。

書いて 見て 聞いて 満喫

第3回 手書き文字ばんざい!

楽しく書に親しんで

本院は、文字に親しむイベント「第3回 手書き文字ばんざい!」を平成19年10月8日、大阪・中之島の大阪国際会議場で開催した。家族連れら約300人が参加、書の専門家から文字にまつわる楽しい話を聞いたり、短冊や凧に願い事を書いたりと、文字に親しむ楽しい一日を過ごした。

このイベントは現代人の活字離れに歯止めをかけるのを目的とした文字・活字文化振興法が平成17年7月に成立、10月27日が「文字・活字文化の日」に制定されたのを機に始まった。今回で3回目を迎え、毎年参加者が定員を超えるほどの反響を呼んでいる。

主催者を代表して中村仁・読売新聞大阪本社代表取締役社長が挨拶、「へ」の文字を書くことから始めた幼いころの体験、そして文字を書くことが人間の成長に大きな役割を果たすことを子供達に話した。次に福光幽石・本院常務理事が「王羲之の蘭亭序が今日まで伝えられている謎」について、高木厚人・同常務理事が「古今和歌集が次々に写本として伝えられていく中でかなが多彩になっていった話」を、それぞれスライドを使って分かりやすく紹介した。

続いて「第2回全日本小学生・中学生書道紙上展」および「第12回全日本高校・大学生書道展」の成績優秀者13人が、特設ステージで一斉に書を披露。毛氈の上で1点1画ていねいに書きあげる姿に、周りを囲んで見守っていた参加者から拍手がわき起こった。

その後、参加者全員が筆を持ち、「心」「力」「いのち」など課題の中から気に入った文字を選び、書写に挑戦。お土産用の凧や短冊には、好きな文字や将来の夢を書き入れた。会場内には、「落書きコーナー」も設けられ、子供達は墨や絵の具などを使って、花やハートを描いたり、自分の好きな文字や名前を書くなど、『書くこと』の楽しさを満喫した様子だった。

クライマックスでは、吉川蕉仙・本院副理事長がプロの技を披露。良寛の詩の一節を大きな筆でゆっくりと書く姿がスクリーンにも映し出された。映像で見る紙と筆とのせめぎあいは舞踊を見るようで、会場内は感動に包まれた。

最後に杭迫柏樹・同副理事長が「手書き文字こそ心が伝わる文字、日本の文化であるこの手書き文字の素晴らしさを多くの人に共有してもらうことで我々も、社会も素晴らしくなっていく。手書き文字を大いに盛んにしていきましょう」と挨拶、イベントを締めくくった。

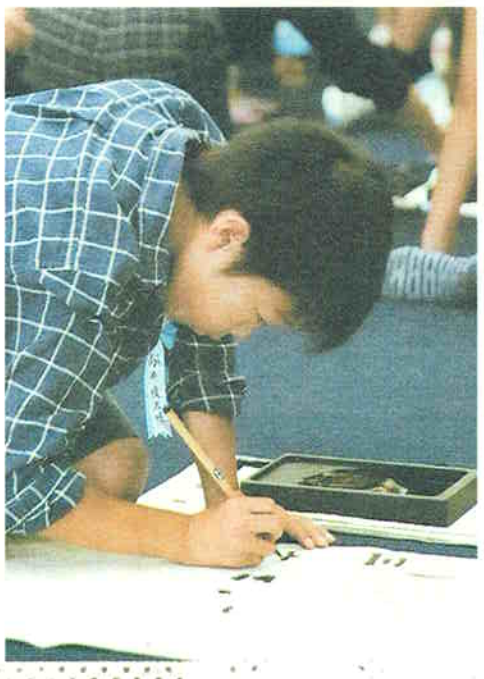
参加者は「ほんとに楽しかった」「またやって下さい」と満足した様子。今年は新しい趣向を加える予定だ。手書き文字が多くの人の間で大切にされることを期待している。

空一ぱいに の字を書いた

大作揮毫作品（吉川蕉仙・本院副理事長）

はじめて筆で書いた／自分見つめる良い時間

手書きの文字
写・書道ってすばらしい
き れいに美しく
文 字を書こう
字 の美しさは文化のバロメーター



参加者の声

兵庫・浜脇小1年　中西敏仁（7）「はじめて筆で字を書いた。難しかったけど楽しかった」

大阪・帝塚山学院小2年　奥田秀（7）「楽しかった。ぼくもみんなのように字がうまくなりたい」

奈良・鳥見小3年　麻野琴巳（8）「凧に『青い空』と書いた。中国と日本の話が興味深かった」

奈良・鼓阪小4年　高橋こころ（9）「はじめて参加した。落書きコーナーで字を大きく書いて気持ちよかった」

大阪・大阪狭山市立北小5年　桑岡菜智（11）「字の書き方や筆の持ち方を教えてもらった。私も書道の先生になりたい」

大阪・北鶴橋小6年　吉田美月（11）「学校では書かないような字を書くことができておもしろかった」

奈良・平城東中2年　茶谷和江（13）「パソコンで文章を打つ人が多いなか、とても良い取り組みだと思う」

大阪・寝屋川市立第九中3年　小島奈々（15）「とても楽しく字が書けた。凧に字を書くなんて思いもしなかったので、びっくりした」

兵庫・三田松聖高2年　福井絵梨奈（16）「凧に字を書くのは難しかったけど、楽しかった。また参加したい」

後藤田真弓（21）「色々な体験ができた。家での練習に役立ちそう」

井橋佐代子（34）「学生の代表揮ごうは迫力があった。初心者の私も娘も大満足の作品を書くことができた」

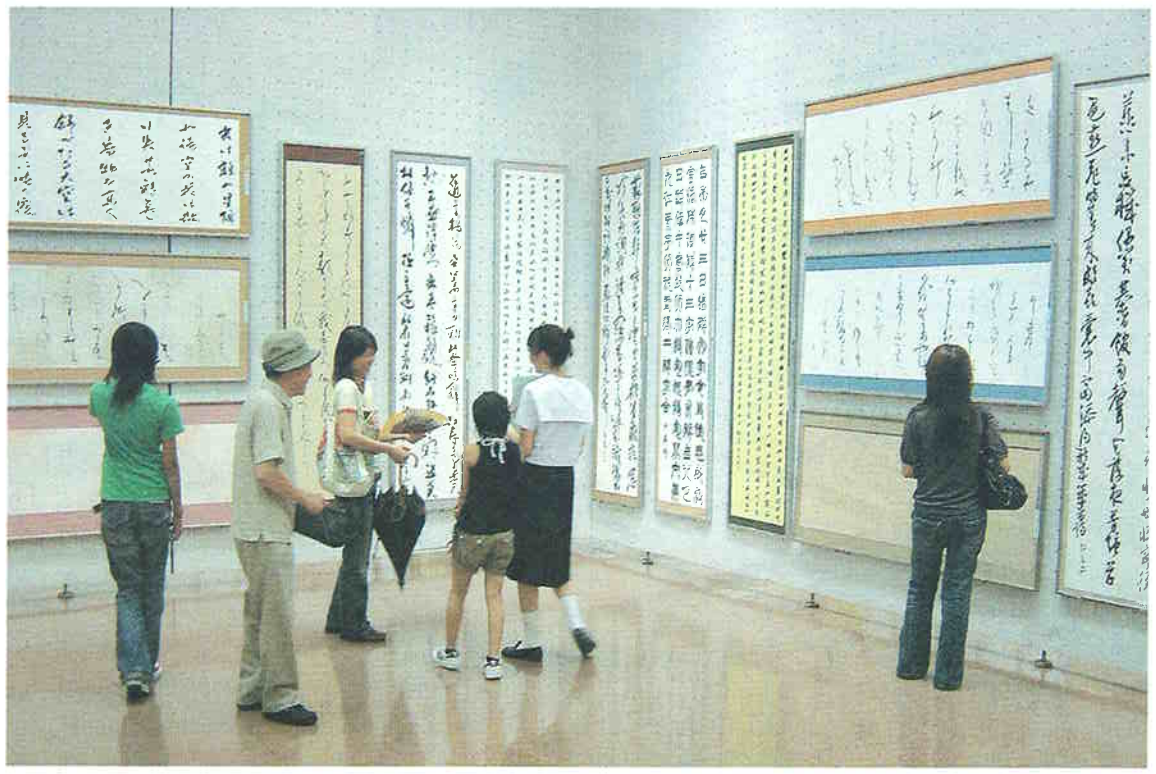
藤川昌子（40）「ゆったりとした気持ちで習字ができた。自分を見つめる良い時間を過ごすことができ感謝している」

馬場泰典（70）「学生の代表揮ごうは堂々とした書きっぷりで見事の一言に尽きる。良い経験ができた」

※「参加者の声」は平成19年10月27日付読売新聞朝刊から。年齢、学年、学校名は掲載当時。

主催　社団法人日本書芸院、読売新聞社
後援　文部科学省、NHK大阪放送局、読売テレビ、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会
協賛　㈱あかしや、㈱呉竹、㈱サクラクレパス、ゼブラ㈱、㈱トンボ鉛筆、ぺんてる㈱、㈱墨運堂

第12回　全日本高校・大学生書道展



本院、読売新聞社が主催する、日本が誇る伝統文化「書道」の継承と発展を目指す公募展「全日本高校・大学生書道展」も、今回で12回を数えた。

今回は半切サイズを取りやめ、全紙・聯落と大作サイズとなったが、〝学生書道のグランプリ〟とあって、全国から1万点に迫る9653点もの力作が集まり、漢字、かな、調和体、篆刻の4部門から、大賞51点、展賞329点、優秀賞941点の計1321点が選ばれた。受賞作は平成19年8月21日から26日まで大阪市天王寺区の市立美術館に展示され、授賞式は8月26日、大阪商工会議所国際会議ホールで行われた。

継承と発展を目指して

9653点 力作集う

【審　査】日　時　平成19年7月30日（月）
会　場　マイドームおおさか　1階

【審査員】（50音順）
読売書法会常任総務　新井光風
本院副理事長　井茂圭洞
〃　杭迫柏樹
本院理事長　栗原蘆水
本院副理事長　黒田賢一
読売書法会常任理事　樽本樹邨
本院副理事長　吉川蕉仙
読売新聞東京本社取締役事業局長　神田俊甫
読売新聞大阪本社執行役員事業局長　松尾　徹

【審査結果】
個人賞
全日本高校・大学生書道展大賞　51点
全日本高校・大学生書道展賞　329点
優秀賞　941点
準優秀作品　1552点
優良作品　6780点

団体賞　高等学校の部
最優秀校　大分高等学校（大分）8年連続8回目
優秀校　東福岡高等学校（福岡）
第3位　埼玉県立松山女子高等学校（埼玉）
第4位　鹿児島県立伊集院高等学校（鹿児島）
第5位　東京学館新潟高等学校（新潟）
第6位　広島県立福山誠之館高等学校（広島）
第7位　明誠学院高等学校（岡山）
第8位　岩手県立盛岡第四高等学校（岩手）
第9位　奈良県立桜井高等学校（奈良）
第10位　沖縄県立宮古高等学校（沖縄）

団体賞　大学の部
最優秀校　京都橘大学（京都）5年連続5回目
優秀校　大東文化大学（東京）
第3位　奈良教育大学（奈良）
第4位　岐阜女子大学（岐阜）
第5位　岩手大学（岩手）
第6位　四国大学（徳島）
第7位　京都教育大学（京都）
第8位　中京大学（愛知）
第9位　尚絅大学（熊本）
第10位　甲南大学（兵庫）

出品点数　9653点

○種別
第1種　4829点（日展・読売サイズ）
第2種　4331点（全紙・半切二幅・聯落）
第3種　493点（篆刻）

○多数出品都道府県（上位10府県）

京都府	793点
大阪府	721点
新潟県	571点
大分県	567点
広島県	544点
福岡県	515点
鹿児島県	480点
埼玉県	476点
兵庫県	446点
愛知県	435点

○参加団体

高校	4926点
短大・大学	1819点
関東・中部会派	586点
専門学校・個人出品等	356点
本院会派	1966点

学生書道のグランプリ　第13回 全日本高校・大学生書道展（予告）

【作品受付】平成20年6月30日（月）締切　※30日消印有効
【会　　期】平成20年8月26日（火）～31日（日）
【会　　場】大阪市立美術館 地下展覧会室 全室（入場無料）
【主　　催】社団法人日本書芸院・読売新聞社
【後　　援】文部科学省（申請予定）
◇陳　列　大賞・展賞・優秀賞を陳列します。（約1300点）
◇授賞式　展覧会最終日に授賞式・祝賀パーティーを開催します。
■作品募集要項の詳細はホームページでご確認下さい。

第2回　全日本小学生・中学生書道紙上展

より豊かな人間形成を

小学生・中学生の書写書道の技術向上を図り、書道を通してより豊かな人間形成が促されることを目的に、本院と読売新聞社が平成18年に創設した「全日本小学生・中学生書道紙上展」の第2回審査が行われた。今回は全国から2万2331点の応募があり、各学年ごとに「ベスト100」作品が選ばれた。優れた作品が多かった学年では選出数が100を超え、小学校6学年、中学校3学年で計922人が栄冠に輝いた。

全国から応募2万2331点

「ベスト100」に認定証を発行

出品点数　2万2331点

◇学年別

小学1年生	1065点
小学2年生	2140点
小学3年生	3047点
小学4年生	3463点
小学5年生	3669点
小学6年生	3403点
中学1年生	2257点
中学2年生	1840点
中学3年生	1447点

◇団体別

小学校	139点
中学校	396点
本院会派	1万5449点
書塾	5423点
その他	924点

【審　査】

日　時　平成19年10月3日（水）
会　場　OMMビル2階　会議室
審査員　本院理事長　栗原蘆水
　　本院副理事長　井茂圭洞
　　〃　杭迫柏樹
　　〃　吉川蕉仙
　　〃　黒田賢一
　　読売新聞大阪本社執行役員事業局長　松尾　徹

【選考内容及び賞】

一、各学年の優秀作品「ベスト100」を選考し、賞品と図書カードを授与。
二、準ベスト100には図書カードを贈る。
　ただし、団体出品の場合は代表者を通じて送付。

【成績発表】

◆11月17日（土）。読売新聞紙上及び本院ホームページにて発表。各代表者に成績通知を郵送。ただし、団体出品の場合は代表者を通じて送付。

第3回 全日本小学生・中学生書道紙上展（予告）

【作品受付】平成20年8月31日（日）締切　※31日消印有効
【出品資格】小学校・中学校の在籍者（平成20年8月31日　作品受付締切時）
【部　　門】小学1年生の部から中学3年生まで各学年を部とします（9部門）
【主　　催】社団法人日本書芸院・読売新聞社
【後　　援】文部科学省（申請予定）
■作品応募要項の詳細はホームページでご確認下さい。

詳細はホームページで

「全日本高校・大学生書道展」「全日本小学生・中学生書道紙上展」の今年の作品応募要項や、昨年の詳しい結果報告は、下記ホームページをご覧下さい。

「全日本高校・大学生書道展」
「全日本小学生・中学生書道紙上展」事務局
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
　　OMMビル7階　㈳日本書芸院内
電　話　06-6945-4501
FAX　06-6945-4505
Eメール　info@nihonshogeiin.or.jp
http://www.nihonshogeiin.or.jp/

書写の現場から

指導者の声

小学校

京都市立鏡山小学校　石澤　喜久代

お互いに学び合ってほしい

「さいしょにれんしゅうするとおもってたけど、きゅうにほんばんがあるとおもいました。がせんしをつかったのがはじめてで、つかってたらたのしくなってきて、うつくしい朝の朝がかけなかったんでくやしかって、二まい目もかけなくていしざわせんせいがもう一まいくれてさいごの一まいに（が）せいこうしてうれしかったです。」（四年A男）

今年度、私は四・五・六年書写専科を担当しています。

新年、はじめての学習は床にすわっての書き初め。四年「美しい朝」、五年「世界の国」、六年「夢を育てる」、八つ切り画仙紙に書きました。どの学年も教材文字はすべて既習の筆遣いなので、あえて練習はせずに、基準確認のあと、直ちにまとめ書きという授業にしました。

四年のA男さんは、学習のふり返り（自己評価）に、くじけずがんばり、成功した喜びを書きました。ひらがなばかりのつたない文章ではあるけれど、「さいしょはむずかしいとおもってたけど、できてよかったです。」と最後に結び、満足げでした。

「今年初めての書写なので少しびびって、一回目はうまく書けなかったけど、二回目は気をとり直して、うまく書けた。こん後の目標は、ひらがながむずかしかったので、ひらがなをきれいに書くことです。」（六年B男）

私立中学受験を控えて最後の追いこみ中のB男さんも、一回目はうまく書けなかったけどくじけずがんばりました。

どの子どもたちも「美しい文字が書けるようになりたい。」と願っています。年間三十時間の書写の授業、二十二時間目の書き初めでは、これまで学んできたことをしっかり生かしてがんばりました。

作品はすべて台紙に貼り、教室や階段の掲示板に展示しました。お互いの作品を鑑賞し合うことにより、たくさんのことを学び合ってほしいと願っています。

三年生の書き初め「友だち」の授業に入らせてもらった時のC子さんのことばです。

「わたしは、友だちの『だ』がうまくかけました。だから、じぶんのかく『だ』が、すきになりました。四年生になったら『おれ、とめ、はらい』をがんばりたいです。」

書写学習のもつ力を、一人でも多くの子どもたちに広げていきたいと思っています。

中学校

大阪府寝屋川市立第一中学校　荻生　佳子

書く楽しさ、大切さ理解して

本校では国語科の時間に毛筆、硬筆を取り上げ、一学期に毛筆で楷書「若木」「地球」の二課題を学習した。中学生になると、小学生時にいわゆる書塾で習っていた者もほとんど続けることなく、一クラス四十人の中で二、三人が継続して習っているに過ぎない。書塾では楷書を書いた者が大部を占め、二学期に取り上げた行書については習った者はごく少数であった。用筆、手本の見方など一学期の楷書学習の基本を復習。行書の特徴を楷書と比較して、その違いを説明した。すなわち、速書体であること、言いとした。「ノート、メモを考えてごらん。」と。

行書を学習して生徒の感想として出て来たものは、（一）行書を習ったことがなかったので難しかったというのが大半で、行書体の課題が「日光」の二字であったにもかかわらず、導入時に苦労したことが出て来た。その反面、（二）おもしろく習えた（三）早く書けるので楽しかった（四）行書を初めて習ったことは良かったという反応があり、行書の学習は一年生には難しいのではないかという思いがあったが、この感想が得られたことに安堵しました。このことは、小学校ではもちろん書塾でも行書を習っていないことを如実に物語り、生徒がある程度の興味を持っていることにも注目する必要があると思う。また、冬休みの課題として「書き初め」の意義を説明し、「大洋」を課した。その成果が写真の通りです。

ともすれば国語科の学習では時間が取り難い中でも一学期の楷書、二学期の行書に続き、三学期には硬筆を取り上げる予定をしている。とにかく筆であれ、鉛筆であれ文字を書く楽しさ、大切さを少しでも理解してほしいと思っている。

高校

岡山県私立明誠学院高等学校　筈井　淳

美しい心育てる「道」の精神を

今の生徒は人から教えてもらうことに慣れすぎ、自ら行動し創造する能力が低いように感じる。また、コミュニケーション能力が低く集団での調和を求めず、弱音をすぐに吐く生徒が多いように感じる。

本校は中国地方でも数少ない書道の専門コースを持った学校である。作品は一人でも作れますが、本校のコースやそのコースを中心とした書道部では、「個」ではなく「輪」を大切に活動しており、「技術」を磨くことはもちろんのこと、生かされていることに感謝し、気づかいができる優しい心を育て、将来、社会に奉仕できる人を「書道」を通して育成することを目的としている。

（1）作品制作が育てる「人間力」

好きだからこそできることかも分かりませんが、生徒は寝る間を惜しんででも制作にあたり、その姿勢には感心させられる。自分の力に必ずなると信じ、時に仲間に支えられながら努力する過程の中で、苦労を苦労と思わない忍耐力が形成されていると考える。

手本は一切書かず、下手でも良いので自ら作品を制作するよう指導している。技術は人から盗むものである。受身ではなく常に攻めの姿勢で疑問を感じ、貪欲に何かに気づき分析することによりその人にしか作れない良い作品となる。このような機会を与えることにより、真剣に物事と対峙し、自ら行動する能力が育まれると考える。また本質を正確に見極める力があればどんな物事でもうまく進めることができるということを学習させるためにも、作品の表面的な部分だけを捉えるのではなく、本質を押さえるよう指導している。

（2）組織の中で育てる「人間力」

一人ひとりに係を与え、物事を進める際には必ずその係を通して考えるようにさせている。その際、ゴールイメージの共有化と相談・連絡・報告を大切にしている。作品も同様であるが、明確なゴールイメージを持たせることにより、質の高い作品へ変化する。また、そこへ向けての計画力の向上に繋がる。相談・連絡・報告を密にとることにより、互いの失敗を補い合うこともでき、コミュニケーションの重要性と仲間の大切さを学ばせている。

後輩の指導や合評の際には、単純に自分の考えを押し付けるのではなく、相手の気持ちを理解し、どのように話せば受け入れてもらえ、人の気持ちを動かすことができるかということも考えながらコメントを返すようにさせている。これは時として自分のことを我慢してでも相手のことを真剣に考える思いやりがないとできないことである。普段からこの様な考え方をさせることにより、気遣いができる人への成長やリーダーシップ力向上を助けていると考える。

柔道、剣道、華道、茶道といった「道」のつく日本文化は私たちが忘れかけている日本人の心を呼び戻すものだと考える。中でも、一人でも取り組め、広い場所と多くの道具を必要としない書写書道は「道」の精神を極めて簡単にかつ継続的に学ぶことのできるものである。国が豊かになり、物事の考え方が組織ではなく自己中心的なものに代わりつつある今、「道」の精神を伝えることのできる書写書道教育こそ重要なのではないか。

その昔、私たち日本人の祖先は、宣教師をはじめ多くの西洋人に「美しい心」を持った民族であると称えられる美徳を備えていた。

今こそ生徒に書写書道を通して「書くよろこび」を与え、「日本人としての精神」と「人間力」を育ててはどうだろうか。

社団法人 日本書芸院

昭和二十一年に誕生した本院は、年々発展の一途をたどり、会員は全国におよび約二万人を擁する書壇屈指の団体です。国内はもちろん、積極的な国際交流も展開し、「書」の振興・発展のためまい進してまいりました。会員中より文化勲章受章者二名・日本芸術院賞受賞者二十六名など有能な著名作家を多数輩出しています。新進作家の育成にも努め、毎年日展ほか全国有名展に入選・入賞者を続々と送り出し、実力者の多いことでも書道界随一です。今後も更なる充実を目指すとともに、本院の理念とする「伝統と創意」を、次の世代に引き継いでまいります。

「伝統と創意」
次の世代へ

■展覧会

＜日本書芸院展＞

日本書芸院会員相互の共励琢磨による「書」の本質的研究を通して、後進の育成に尽力しています。

- ●日本書芸院展（役員展）および特別展観
  会場：大阪国際会議場（大阪市北区）
- ●日本書芸院展（公募展・会員展）
  会場：大阪市立美術館地下展覧会室（大阪市天王寺区）
- ●特別企画展・海外展

＜その他の企画展＞

小学生からシルバー世代まで、全世代を網羅する書道展を開催して、書の啓蒙と普及、我国文化の継承・振興・発展のために活動しています。

- ●全日本小学生・中学生書道紙上展
  読売新聞紙上
- ●全日本高校・大学生書道展
  会場：大阪市立美術館地下展覧会室（大阪市天王寺区）
- ●全国シルバー書道展
  近畿2府4県および三重・岡山・広島県で開催

■講習会

- ●記念講演会　●夏期講座
- ●「手書き文字ばんざい！」
  文字・活字文化の日記念イベント

■出版

- ●作品集・図録　●機関誌・会員名簿
- ●研究誌・記念誌　●広報紙「書くよろこび」